

ちよつとだけ

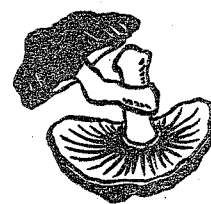
田舎暮らし

「大人の新生活」が
ここにある!



茨城県北部の天子町には、古い農家を利用したお試し移住物件がある。さらに今後は、広大な土地を無償貸与することも決まって、お試し移住希望者の熱い視線が注がれている。

連載
第24回

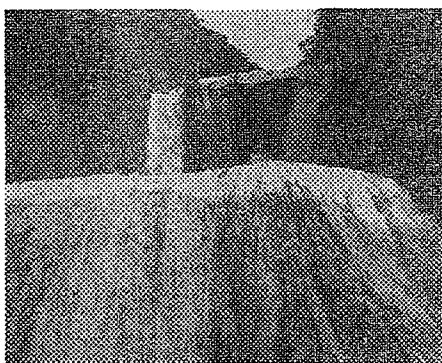


風光明媚な天子町で 古民家移住暮らし 300坪20年無償貸与も

日本三名瀑の一つ・袋田の滝、釣り人に人気の高い清流・久慈川、県内屈指の温泉地・奥久慈温泉郷で知られる茨城県北部の町が、天子町だ。福島県や栃木県と接しているが、東京から車で2時間台で行けることもあって移住や二地域居住の候補地として人気が高い。受け入れ側の天子町はもろろん、茨城県も県北地域の活性化を推進しているため、ほかの町に先駆けて天子町にお試し暮らし用の物件を用意するなど熱心だ。その力の入れようは、取材を申し込んだ段階から感じられた。とにかく対応が早いのだ。申し込みから数日で段取りを組み、当日も天子町や県の担当者が現地へ出迎えてくれる。こうした態勢がしっかりしていれば、移住の相談もすばや

対応をしているのだろうかと思像できる。

そのお試し暮らし物件は、町役場から車で20分ほど、のどかな田園地帯にあった。周囲の田んぼは稲刈りをしたばかりで、あちこちで刈り取った稲を天日干ししている光景が目に入る。今どき、しっかりと天日干しをする風景は珍しい。「そうでしょ? だってウチは日本一のコシヒカリの町ですからね」



天子町の名所、袋田の滝

案内をしてくれた大子町企画課の浦浪秀行さんは胸を張る。昨年11月に行われた「お米日本一コンテスト」で、この町の農家が生産した奥久慈コシヒカリが最優秀賞に選ばれたのだという。さぞかしうまい米が食べられるのだろう。

お試し暮らし用の物件は1930年に建てられた敷地面積525平方メートル、建物床面積106平方メートルの小林邸だ。もとは麦わらの屋根根だったのが、70年にトタンに改修・増築したという。

さっそく中に入ってみると入り口は農家の名残を残す土間造り。上がったところろにいろりが切つてある。そして奥に台所。ほかに和室が3部屋という構成だ。気になるのは家の内外装だが、築77年というだけあって、改修したとはいえず古さは否めない。しかし、電気、ガス、水道などはしっかりと整備されており、テレビ、電話も完備。隣には畑があり、自由に

使うことができる。うれしいことに、インターネット回線も引かれている。

「お試し暮らし体験者には、滞在中にネットを使つた情報発信をしていただいています」（浦浪さん）

つまり、お試し暮らしの生の情報をインターネット

町有地を20年間無償貸与！

今年、小林邸を利用したのは、現在進行形も含め京都、千葉、埼玉などからの5組11名（9月13日現在）。

大子町に直接申し込む方法もあるが、管理運営は県北地域の活性化と地域PRを進める「いばらきグリーンふるさと振興機構」が担当しているの、こちらでもOKだ。

取材当日は、機構から調査役（田舎暮らしサポーター）の佐藤英雄さんが来ていて、室内を念入りに掃除していた。大子町での暮らしを満喫するうえで大切なことを聞いてみると、「虫がダメって人は、ここは向かないよねー」

冬はともかく、田舎の古

（ブログ）で配信していると、この10月より、大子町ふるさと農園整備事業「山田ふるさと農園」を展開していくのだとか。これは旧営林署用地（町有地）の一部を農園付きの住宅用地として、希望者に20年間にわたって無償で貸し出すというもの。現在のところ、全15区画を予定しており、1区画当たり300坪ほどの広さになっている。

募集条件は町外に住所を有するおおむね65歳以下の人。定住、または二地域居住（年間90日以上）すること。応募者の負担により、平屋の家屋を建てること。建築業者は町の業者、木材の2分の1以上は県内産を使うこと。契約後1年以内に居住することとなる。

また、利用者には定住推進奨励金（住民票を移したら家屋の固定資産税相当額を

3年間交付）や、木造住宅助成金（50万円/戸、県内木材、町内建設業者利用の条件あり）、町営浄化槽制度（本体工事費の約8割を町が負担）などの優遇施策も用意されている。

第一次の募集は、この10月に行われる予定だ。当然のことながら審査もあるが、興味のある人は大子町の企画課に問い合わせしてみたいだろう。

取材・文 西内義雄

もう一つ、大子町では新たな移住・二地域居住促進

政策を計画中だ。具体的には、この10月より、大子町ふるさと農園整備事業「山田ふるさと農園」を展開していくのだとか。これは旧営林署用地（町有地）の一部を農園付きの住宅用地として、希望者に20年間にわたって無償で貸し出すというもの。現在のところ、全15区画を予定しており、1区画当たり300坪ほどの広さになっている。



小林邸とサポーターの佐藤さん

ちよつとだけ

田舎暮らし

「大人の新生活」が
ここにある!



田舎暮らしを夢みても、実際に物件を探してみると、なかなか思うとおりにはいかないものだ。先週紹介した茨城県大子町で昨年、賃貸物件を見つけた河合さん夫妻も、決して例外ではなかった。

連載
第25回



茨城県大子町での 移住苦労働体験生かし 後進にアドバイス!

東京近郊での田舎暮らしを考えている人にとって、茨城県大子町は実にホットな場所だ。名瀑・袋田の滝や溪流釣りのできる久慈川、日本一のコシヒカリなど築しめる要素が多く、お試し移住用の物件も用意されている。さらに最近では、町有地を無償で20年間貸し出す政策も打ち出している。もちろん、すでにここで暮らしを楽しんでいる人もいる。今回紹介する河合眞英さん(60)と信子さん(59)は昨年9月から大子町に居を構えた夫婦だ。

「私たちは水戸市に住んでいます。2地域居住にして田舎暮らしできるところがどこかないか探していたんです。そこで去年の3月に水府村(現・常陸太田市)を見に行ったら大子町を回り、空き家を見つけ

ては近所の人から話を聞いていました」(眞英さん)

そんな中、あるソバ店で築100年以上の民家に空きがあるという聞き、行ってみたものの1週間前に借り手が決まっていた。しかし持ち主から「町からの紹介ですか?」と聞かれ、初めて大子町が田舎暮らしの世話をしてくれることを知った。

すぐに役場に行くと、なんとその日のうちに役場の車で5軒ほどの空き家を案内してくれたのだという。

その時、最初に連れて行かれたのが現在の住まいだ。当時は2人の理想と違う点があり、しばらく別の物件を探す日々が続いた。当然、大子町だけでなく近隣の地域にも足を運んだ。

「隣と100坪は離れていること、山奥で家がつしりして、畑があつて水

戸から通える場所で、雪の降らないところ……なんて虫のいい条件ばかり出していたので、なかなか見つからなかった」（眞英さん）

ある時、朽ち果てる直前の家を見つけ、手直しが必要だが買うつもりになったことがあった。案内してくれた業者が相場を聞くと、裏山を含めても100万円あればおつりがくるといふ話だった。ところが、いざ地権者に話をしてもらうと、次々に親族から権利を主張する人が出てきて、800万円を提示された。

話にならないので、最初に紹介してもらった、現在住んでいる物件に戻り家主と交渉し、賃貸で借りることができたのが昨年5月のことだった。

家は古い木造の民家と隣のモルタルの2階建文化住宅のセット。幸い畑も近くに借りることができて、

賃料は月額3万円。

これは安い！ 単純にそう思うってしまうが、

「最初は僕

もそう思いました。でも、10年の期限付きだし、改装して住めるようになるまで1年、300万円以上かけて直しましたからね。そう考えると安くはありません」（眞英さん）

つまり、300万円を10年で割ると30万円、月当たり2万5000円の経費がかかっていることになり、月3万円の家賃と合わせて月額5万5000円。

移住アドバイザーもこなす

河合さん夫婦が家の応急的な改装を終え、実際に住みだしたのは、4カ月後の昨年9月のことだった。畳はすべて新しくしたが、ここでも問題が発生。月の半分を水戸で生活している、大子町の家にはホウキで掃くと煙が上がるほど、

大量のカビが畳にたまるのだ。新しい畳はカビが発生しやすいことをこの時、初めて知ったという。人間が住むことによつて二酸化炭素や脂がしみついて落ち着いていくので、今年はずいぶんマシになったそうだ。

借りた時よりキレイにして返すのに割りが合わない。さらに、古民家は空き家のままだとどんどん朽ちてゆく。週に1回、窓を開けるくらいではダメなのだ。

それゆえ「家賃などいらない、住んでくれさえすればいい」という物件が、実は周囲にたくさんあることを最近になって知った。これから物件を借りようという人には、参考になる話だ。

話を聞いている最中に、数名の男性が河合家を訪ねてきた。全員が団塊の世代以上の年齢で、聞けば大子町のお試し暮らしを体験した人たちだとか。町を気に入るため、空き家情報を仕入れるためにやって来たのだという。

河合さんは自分たちが家探して苦労した経験をもとに、移住希望者のためにさまざまなアドバイスをしている。すでに町の商工会とも連携し、空き家があれぱすぐに情報が入ってくるようにして、希望者に提供

しているのだ。と同時に、自宅を農家民宿として登録し、「古民家の宿 かわい」として営業もしている。

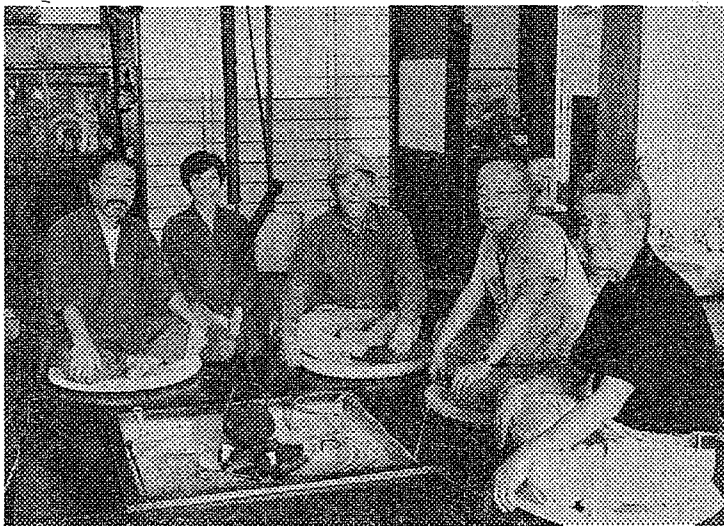
その形態はユニークで1泊の素泊まり3675円。自炊、酒の持ち込みも大歓迎。「一緒に飲みましょう」という姿勢がウケているという。また、新たなお試し暮らしの人が来ると、自分から積極的に訪問し、何か困ったことがないか相談に乗ることも。こうして、人がどんどん増えていくことで、地域に新しい輪ができていく。

当初、苦労を重ねた河合夫妻の田舎暮らし。しかし、移住を考えている人たちが、地元住民との触れ合いを大切にすることで、現在は充実した日々を謳歌しているようだ。

最後に河合さんに田舎暮らしを成功させるための秘訣をうかがった。

「大子町でしたら、冬に住み始めることですよ。いちばんつらい時期から始めて徐々に楽な方向に持っていく。あとは町内会に入ることで、地域の取り決めを守ること、行事には積極的に参加すること。そして最も大切なのは、奥さんの了解を得ること。よく言うでしょ、男のロマンは女の不満ってね」（眞英さん）

取材・文 西内義雄



河合さん夫妻(左側2人)と移住希望者の方々

ちよつとだけ

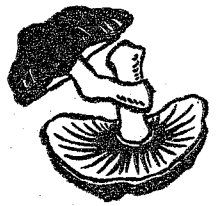
田舎暮らし

「大人の新生活」が
ここにある!



県北地域でお試し移住を推進している茨城県。常陸大宮市、日立市に古民家を利用した物件があると聞いて取材に向かうと、大都会・新宿から移住した男性が、田舎暮らしの魅力を話してくれた。

連載
第26回



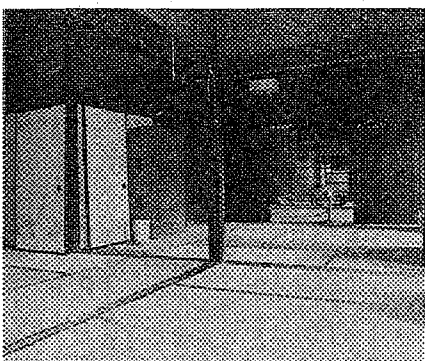
茨城県北で味わえる ネット回線完備の 築150年古民家生活!

茨城県は、県北地域を中心に移住・2地域居住を推進している。前号、前々号で紹介した大子町などをはじめ、きめ細かなサポートで確実に町のファンを増やしている。加えて「お試し暮らし物件」の存在も、町を知らない人への大きなアピールとなっていた。

実はこのお試し暮らし物件、関東ではとても珍しいシステムだ。古い物件を改修する費用や管理するための人件費などの支出が多く、移住促進に使ったところで元が取れるのかという問題に、二の足を踏んでいるのが実情である。

しかし茨城県は違った。県北地域での田舎暮らし相談窓口として「グリーンふるさと振興機構」を開設し、田舎暮らし希望者へのサポートを強く推し進めて

いる。そして、すべての町にこうしてお試し暮らしの物件を置くことを目標に、現在は常陸大宮市と日立市でも運用を開始している。さっそく取材を申し込んだところ、まずは「おためし3号住宅」と呼ばれる日立市の物件に案内された。ここは今年の8月から運用を開始したばかりで、まだ利用者は1組。取材の翌日に2組目が入ることになっており、合間を縫って中を



築150年、日立市のおためし3号住宅

見せてもらった。

まず驚いたのはその大きさだ。平屋ながら昔の農家らしい風格があり、延べ床面積は約150平方メートル。それもそのはず、実は江戸末期の建築と言うから築150年ほどの古民家だ。中に入ると大きなはりや年季の入った家具が置いてある。庭に面した和室(14畳、8畳、4畳、8畳)は、ふすまを開ければすべてつながり、開放感にあふれている。

そのほかに掘りこたつのある居間と台所。土間もしっかり残っている。風呂は五右衛門風呂を改修して通常のものにし、トイレも土間の一部に新たなものを造るなどして現代の生活事情に合わせている。また、大子町の物件と同様、インターネット回線も引かれ、畑も無償で貸し出される。もちろん、畑仕事のやり方に不安がある人には、近隣に住む田舎暮らしサポーターがアドバイザーとしてくれるなど態勢も万全だ。

念入りな下見で納得の決断

一方、常陸大宮市にある「おためし2号住宅」は、1983年に建てられた物件で、延べ床面積はおよそ100平方メートル。これまで見てきた大子町や日立市の物件に比べると、現代の住宅に近い。こちらも元は農家だったらしく、敷地はとて

利用していたのは東京都新宿区からやって来た森本久明さん(66)。元自営業で、自由な時間ができようになり1年半がたったと自己紹介してくれた。

「僕は若いころから沢登りとか登山とか、とにかく山が好きでね。アウトドア派って言うんですか? もともとこういう山里が好きなんです」

しかし、理由はそれだけではなかった。実は森本さん、今年6月に心筋梗塞で倒れた経験がある。そこで療養を兼ねて大子町の月居温泉に行った際、地元の人から周辺の地域でお試し暮らしをやっていることを聞いたのだ。そこで大子町に

も広く大きな納屋もある。間取りは5DKほどで、かなり広く感じる。

取材時、すでにお試し暮らしを体験中の人が出たのだが、快く中を見せてくれたうえ、暮らしぶりについての話も聞くことができた。

問い合わせしてみると、すでに住んでいる人がいて、しばらく空きはないという返答が来た。

しかし、近々ほかの町でもお試し暮らし物件がオープンするからと、県北地域の相談窓口である「グリーンふるさと振興機構」を紹介され、この物件に巡り合った。

普通ならここですぐに決めるのかもしれないが、森本さんは即決せず、近隣の宿に2泊しながら下見を実行した。

「お試しといえども生活するんですからね。買い物だつてしなきゃならない。だからさういふんと周囲を見て回りましたよ。そうしたら

結構便利なところでしたね、見晴らしもよかったです」

そして、森本さんは今年9月中旬にお試し移住をスタート。奥さんに田舎暮らしがしたいと言うと「どうぞ」と勧めてくれたが、自分分は都会が好きだからベ

スは東京に置きたいと言われたそう。だからお互いのベイスは保ちながら、奥さんは時間のある時に行き来する。無理に田舎暮らしを強要するよりも円満な方法だ。

ところで、大都会・新宿から山里へと暮らしの拠点を変え、どんな気分なのだろう。

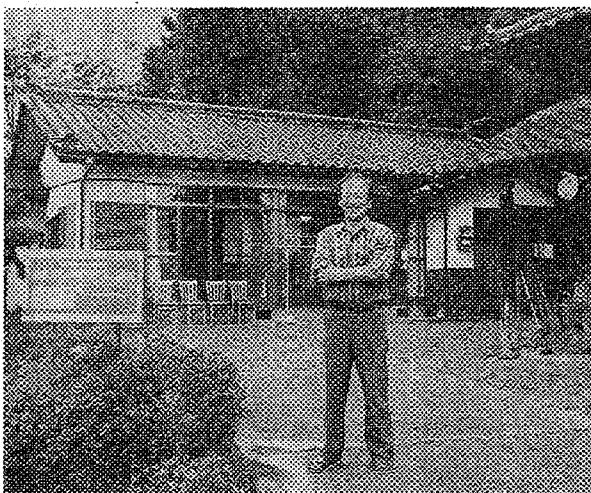
「空気がいいですよ。それがまず一番です。それから生活がとても規則正しくなりました。例えばゴミ出しだってね、ここは朝8時なんです。きちっと朝7時ごろには起きないと出せない仕組みなんです。それだけで早起きになりました(笑)。あとね、この

辺りの人は誰に会っても必ず挨拶するんです。大人も子供も、みんなです。それがいいじゃないですか。食生活も肉食から野菜中心になってきました」

現在、森本さんは自分の移住のために、周辺での空き家情報を収集中。地域の人たちとなじみになるにしたいが、入ってくる情報も増えている。

「移住を考えているなら、ぜひお試し暮らしをやってみるべきです。オススメします」

取材・文 西内義雄

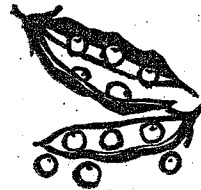


森本さんとおためし2号住宅

ちよつとだけ

田舎暮らし

「大人の新生活」が
ここにある!



連載
第27回

田舎暮らしを始めるには、もちろん綿密な下調べが必要だ。そのためにも各自治体はお試し移住を勧めている。しかし、熱い情熱と強い意志で、いきなり田舎暮らしに飛び込む人もいる。そんな一例を紹介しよう。

常陸太田市の応対に
移住即決した夫婦の
大満足田舎生活!

長年の都会生活を捨てて田舎暮らしを始めるには、それなりの準備が必要だ。できればお試し暮らしを経験し、下調べをしつかり行うべき……と本誌では何度

も書いてきた。きつとどの「田舎暮らし本」にもそう書いてあるだろう。しかし、何事も教科書どおりにいかないのが世の常。偶然が幸福を呼ぶこともある。

神奈川県横浜市で新聞販売店を営んできた鈴木さん夫妻(夫64歳、妻62歳)は、近年のインターネットの普及やチラシの減少などによる経営不振に、ある思いが募っていた。

「もう仕事のことはずべて忘れて、田舎でゆつくりしたいね」

2人で販売店を切り盛りし、数字とにらめつこの日々を送ってきたこともあ

り、夫婦の意見は一致した。そこで、昨年からは田舎暮らしの情報を集め始めて、さまざまな候補が浮かんで消えた。時には海外も頭によぎったが、

「娘や息子もいるし、親族には高齢者も多い。海外は無理だろう」(夫)と結論を出し、国内に照準をしぼった。ご主人が東京、奥さんが栃木出身ということもあり、関東圏の千葉県や茨城県のいくつかの自治体に電話をかけたのだが、どうもピンと来ない。

「私の勤とでも言いますよ。現地に行くほどの価値を感じなかったんです。電話の対応をしてくれた人たちに、しっかり受け入れてあげましょうという力を感じなかった」(夫)

つまり、受け入れる側のやる気が感じられなかった

のだ。鈴木さんにしてみれば、年金をやりくりしながら暮らしていく場所だから、失敗はしたくない。それなのに受け入れる側の自治体は、移住促進を掲げていながら、かけ声ばかりで実態が伴わない。行ってもムダだろう、と思ったとか（実際、いろいろな移住促進地域を取材するにあたって、同様に感じる人が多い）。

そして今年6月、たまたまテレビで、茨城県常陸太田市のお試し暮らし物件の話題を目にした。翌日、テレビ局に電話し、管理者である「グリーンふるさと振興機構」の連絡先を聞いて、さっそく問い合わせしてみました。すると……

「今まで話をした自治体の人たちと違うんですよ。ここに頼めば間違いないと、ピンと来ました」（夫）

すぐに移住についての話をすると、担当者から、まずお試し暮らしを体験してみても、と提案された。自分の直感に自信を持つ

ていた鈴木さんはそれを断り、いきなり空き家探しを依頼した。当時のことはグリーンふるさと機構の担当者も覚えていないという。「こちらは、あまりいい返事をしなかったんですよ。初めて来るような人がパツと決まるなんて話は、そうそうないですからね。ちょっと難しいですよと正直に忠告しましたよ」

しかしご主人は、その正直な対応も気に入った。「そのころはもう、お試しをして、ダメなら横浜に戻るなんて考えじゃなかった

予想の半値で古民家を購入

幸い子供たちの反対もなく、田舎暮らしの準備は整った。そして最初の電話から1カ月後に現地に行き、紹介された空き家が常陸太田市にある築約70年の物件だった。同時に近隣の4軒ほども紹介されたが、最初に見た今の住まいを、2人ともすぐに気に入った。交渉の末、年内は賃貸、年末に売買の契約を交わすということで話は進み、売買の

んです。女房とも話をして、どんな場所でも、ついでに住みかにする努力をしようって決めてました。暑ければ暑いなり、寒ければ寒いなり、の努力をすればいい。そう思ってたんですよ」

一方の奥さんも、「仕事を辞めたあとも、横浜に住み続けるという手もありました。でも、そこにいたんじゃ、仕事絡みの友達がたくさんいる。この際だからすべてのしがらみを断ち切って、新しい町に暮らすのもいいんじゃないかなって思ったんですよ」

額も鈴木さんが考えていた額の半値ほどだった。手入れがよかったため、手直しが必要な部分は少なく、水道やガスの工事の80万円ほどで済んだ。そして今年7月中旬に入居。住み始めてからの感想を聞くと、「こんなにいいところなのか！これが正直な感想です。朝起きて窓を開けるとね、ウグイスの音が聞こえるんですよ。横浜だったら

窓を開けたとたん車音です。朝日の美しさも格別です、真夏も朝晩は涼しくてクーラーはいりませんでした。自然のすばらしさを実感しています」（夫）

「いい空気が吸えるってことを実感しています。不満なんて何一つありませんよ。ほら、あの子たちも、すっかりのんびりしているでしょ？」（妻）

指さす方向には、2匹の犬があくびしていた。なるほど、みんな気持ちよさそうだ。「常陸太田って山のつもりでしたが、日立の海側まで

車で30分足らずなんです。そこに行けば新鮮な魚が安く買えるんですよ。今まで深夜に寝て朝10時くらいに起きていたのに、今じゃ朝5時起き。夜10時には寝てます。そういうサイクルになるんですよ。これが自然なんです」（夫）

夫妻は終始笑顔で、移住話は尽きなかった。おふたりは引越してきてからというものの、道で会う人全員に挨拶をしているという。これも田舎になじんで移住暮らしを楽しむための秘訣である。



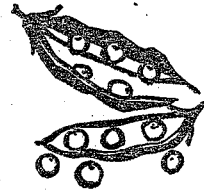
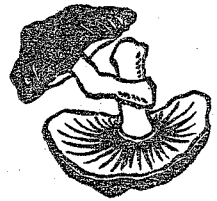
「近々、畑にも挑戦したい」と鈴木さん夫婦

取材・文 西内義雄

ちよつとだけ

田舎暮らし

「大人の新生活」が
ここにある!



連載
第28回

茨城県北の取材にあたり、いつも窓口になってくれるのが佐藤英雄さんだ。定年退職後、地元のために働きたいとUターンした「田舎暮らし人」だが、今や茨城県の「名物田舎暮らし案内人」として活動している。

茨城県北を熟知する 田舎暮らし案内人が 移住成功の秘訣伝授

5週にわたりお伝えしている茨城県北部の移住・二地域居住情報は、茨城県常陸太田市に拠点を構えるグリーンふるさと振興機構が総合窓口になっている。

毎回案内してくれる佐藤英雄さん(57)は、地域のことを本当によく知っているし、移住希望者たちからとても信頼されている。地元の人に溶け込み、移住希望者にはよい顔ばかりせず、時には厳しい意見も伝え、苦言を呈することもある。

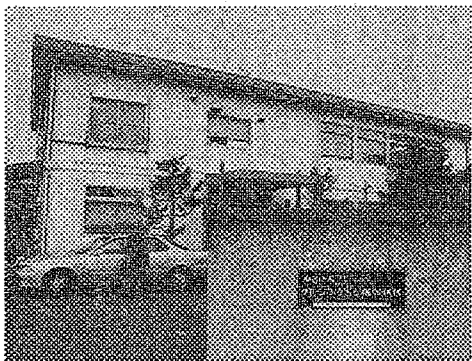
それでも多くの人に慕われているのは、本気で地域のことを伝えていくからにほかならない。

取材の合間に話をうかがってみると、実は佐藤さん自身も定年退職を機にUターンしてきた一人だった。そこで今回は佐藤さん自身の移住体験を取り上げてみ

よう。

佐藤さんは1950年生まれ。茨城県里美村(現・常陸太田市)に農家の長男として生まれた。東京に出てきたのは18歳の時だった。

大手の電力会社に就職し、以来、都内に暮らしながら技術畑を歩き、最後の10年ほどは管理職も経験。55歳の時に、会社の規定により定年退職の手続きを行った。定年退職と言っても会



県北の移住情報を扱うグリーンふるさと振興機構

社には独自の制度があり、いったん退職しても関連会社などに再就職することができた。また、関連会社ではなく自分が希望する再就職先があれば申請を出し、認められれば、元の電力会社からの派遣として働ける制度もあった。佐藤さんが選んだのは後者だった。

「自分は農家の長男ですからね。実家に戻らなければいけない、とは思っていません。本気で帰ろうと思っただのは退職する1年くらい前からでした。」

帰ることを決めた時、佐藤さんには「どうせ帰るのなら、地元のために働くことをやりたい。そういう職場で働きたい。できれば今までとまったく違った環境でやってみよう」という思いがあった。そこで見つけたのが、地元で拠点を構えていたグリーンふるさと振興機構だった。佐藤さんは元の会社で働きたい旨を伝え、機構と会社との話し合いにより、会

社からのボランティア派遣という形で、翌年4月から働くことになった。家族の反応はというと、

「妻は最初、東京をベースにしたいと思っていたようです。でも、今では逆で、こちらに来てよかったと思ってくれています。」

住まいは実家の土地内にあり、両親とは別棟の家に奥さんと2人暮らし。両親は2人とも元気で、80歳を

「まず飛び込んで交流を」

佐藤さんの実家の周囲では、長男が家を継ぐケースが8割ほどに達しているという。農業はやらないけど実家には戻ってくる。それが当たり前の環境だった。

「長男だけの集まりがありましてね。ある日、若手で本格的に農業やっているのは何人いるんだって話題になって調べたら、仲間内にはいなくて、都会からやって来た移住者だけだった、なんて話になったんです。」

現代の農村地区ならではの笑い話だ。健康面でも驚

過ぎて現役で田んぼ仕事もしているという。だからなおさら、佐藤さんは定年退職後も働く道を選んだのだそうだ。

「実家の周りじゃ、70〜80歳が現役で畑や田んぼ仕事をしていますよ。そこに僕が戻って、仕事もしないでのおんびりしていたら、格好つきませんよ。50代なんて田舎じゃまだまだ青二才、鼻タレ小僧なんです。」

くことがあった。田舎に戻ってきたとたんに不健康になったのだ。

「東京で働いていた時は通勤や仕事などで毎日1万歩近く歩いてました。それがこつちに戻ってきたらみんな車ですから、血糖値が跳ね上がってしまったんです。水や野菜がおいしいから、食欲も出ちゃうし。慌てて健康管理をしっかりとやるようになりました。」

生活の時間も変わった。東京では朝6時半起床、就寝は深夜0時過ぎだったの

が、今は朝5時起床、就寝は夜10時。どうしてもそういうサイクルになつてしまいうさうだ。

現在、佐藤さんは県北地域の空き家情報の収集、管理、移住希望者の案内などを担当し、希望があれば一緒に地域を回ることもある。田舎暮らしの相談窓口として、昨年10月からこれまで約200軒ほどの問い合わせに対応してきた。その中で感じていることは、

「最近では、女性（奥さん）からの問い合わせが多いんです。男性（夫）より話がしつかり進むこともありますね。やはり奥さんが納得することが理想なんです。」

もう一つの傾向として、時間に余裕のある人は移住先が決まりにくい、という。漠然と物件を探している人は、茨城を見たら、千葉も長野も山梨もと欲張り、結局、場所をしぼりきれずにあきらめてしまふのだ。

「よく、田舎の人はわからないと言いますが、田舎の人だって都会から来る人によくわからないと思っっています。じゃあどうすればいいか。飛び込んで会話すればいいんです。そうすれば、僕らがしつかりサポートしますよ。交流もしないままに、イメージだけで物事をとらえようとしないことです。」

移住希望者にとつて、地元を愛する案内人ならではのアドバイスは、とても心強い。

取材・文 西内義雄

